

## 論文の内容の要旨

論文題目 ドイツ語反使役動詞の語彙意味論的研究

(A lexical semantic analysis of anticausative verbs in German)

氏名 黒子 葉子

本論文では、反使役 (anticausative) と呼ばれる動詞のカテゴリーを取り上げ、その意味的な特性を明らかにすることを試みる。主な分析の対象はドイツ語であるが、必要に応じて、その他の言語との比較も行う。

反使役とは、文字通り、使役 (causative) に対置されるカテゴリーである。例えば、「花瓶を割る」という使役事象が問題となる場合には、状態変化を意図的に引き起こす人間や、状態変化の原因となる自然現象など、何らかの使役主 (causer) が直接的に介入すると解釈されるが、それに対して、「花瓶が割れる」という反使役事象では、そのような使役主が明示されず、対象物 (theme) に生じる状態変化のみが表される。実際の言語表現を観察すると、英語では、*John broke the vase* のような使役事象も、*The vase broke* のような反使役事象も、*break* という同一の動詞によって描写される。そして、状態変化の対象物は、項構造上、使役事象においては目的語になり、反使役事象においては主語になる。このような使役と反使役にまつわる項の交替現象を使役交替 (causative alternation) と呼ぶ。ドイツ語には、反使役を表す動詞に 2 種類のタイプがある。1 つ目は、*sich öffnen* ‘open’ のような再帰動詞である。これを reflexive anticausative (RA) と

名付ける。2つ目は、*zerbrechen* ‘break into pieces’ のような自動詞である。これを *intransitive anticausative* (IA) と名付ける。ドイツ語で使役交替が起こるとき、反使役動詞は原則として RA と IA のいずれかの形態として実現される。つまり、動詞の表す意味に従い、反使役の表現としてどちらのオプションを選択するのかが、語彙ごとに指定されていると考えられる。それでは、その形態を決定する意味論的要因とは何であろうか。先行研究では、この点に関していくつかの提案がなされているが、未だに統一した見解は存在しない。そこで、本論文では、「対象物の本質的变化」という一般化を提起し、その有効性を検討する。加えて、この意味的特徴が現れる理由を、語彙意味論の枠組から考察する。

本論文は、全7章から構成されている。まず、分析に先立ち、第1章において、反使役の具体例を提示するとともに、その定義に関わる問題を指摘する。反使役という概念は、先行研究において様々に規定されており、その対象が完全に一致しないことがある。例えば、形態論中心の研究においては、派生形態素のような何らかの形態的特徴の現れる動詞が反使役と呼ばれている。他方、意味論中心の研究では、派生形態素の付加とは無関係に、対応する使役動詞を持つ状態変化動詞が反使役と呼ばれている。また、反使役と並んで先行研究で頻繁に用いられる概念に「起動」(*inchoative*) があるが、この用語についても、語彙的アスペクトに関わる概念との混同が観察されるため、注意が必要である。

続く第2章では、ドイツ語の反使役動詞が再帰代名詞 *sich* を伴って実現される RA と、単独で実現される IA に分けられることを議論の前提とし、このふたつの動詞グループが形態的観点からどのように特徴づけられるかを概観する。そして、それと関連して、形容詞派生動詞、名詞派生動詞、接頭辞付き動詞という3つの形態的分類を紹介する。また、RA と IA のレキシコンにおける分布の傾向や、完了の助動詞選択の現象、RA と IA の両用法を備えた特殊な動詞 (RIA 動詞) の存在にも言及する。

第3章では、ドイツ語に限らず諸言語の反使役動詞を意味的に分析する際に、先行研究において、ふたつの理論的方向性が示されていることを指摘する。1つ目は、使役と反使役が派生的に関連付けられているとする「派生的アプローチ」である。このアプローチは、反使役を基本とし使役を派生とみなす「使役化説」と、使役を基本とし反使役を派生とみなす「反使役化説」にさらに区別することができる。2つ目は、使役と反使役の間に派生関係を認めない「非派生的アプローチ」と呼ばれるものである。本章では、このような派生関係の議論をまとめ、両アプローチの妥当性について詳しく考察する。

第4章では、ドイツ語の反使役動詞の意味的な特性について考察する。先行研究では、ドイツ語の RA と IA の間に有効な意味的相違が認定できるかどうか为主要なテーマとなっており、それと関連して、しばしば動詞の語彙的アスペクトの観点を取り上げられている。例えば、ドイツ語と同様に RA と IA の両形態を持つイタリア語とフランス語においては、動詞の含意する有界性 (telicity) の違いが形態的な違いと結び付いていると言われている。また、ドイツ語の反使役動詞研究では、自由与格 (free dative) の解釈が度々議論されており、外的な使役主を意味的に含意するか否かが RA と IA の形態的な違いに影響を与えるという仮説が提出されている。本章では、これらの論点をひとつひとつ検証する。

第5章では、ドイツ語の RA と IA の間には意味的な違いが想定できるという立場から、「対象物の本質的な変化」という一般化を提案する。すなわち、IA によって描写される状態変化は、対象物に本質的な変化（物理的な存在あるいは本来的な機能の変化）が生じることを含意するのに対し、RA によって描写される状態変化は、そのような変化を含意しないという考えである。この一般化の妥当性を探るために、ドイツ語の反使役動詞を代表的な意味グループに分け、個別に検討する。そして、結論として、音放出動詞からの派生形として分析される自動詞や、完了の助動詞として *sein* ‘be’ だけでなく *haben* ‘have’ も選択しうる自動詞など、いくつかの例に対しては「対象物の本質的な変化」の一般化が有効でない可能性があるものの、その他の大部分の反使役動詞の形態的実現に関しては、この一般化に基づく説明が可能であることを述べる。また、第2章で取り上げた形容詞派生動詞、名詞派生動詞、接頭辞付き動詞という形態的観点におけるドイツ語反使役動詞の分布上の傾向や、先行研究で未解決となっていた RIA 動詞および自由与格の解釈についても、上記の一般化から適切に捉えられることを論じる。

第6章では、「対象物の本質的な変化」という意味的原理を理論的に動機づけることを目標とし、ドイツ語の RA と IA に異なる語彙意味表示 (lexical semantic representation) を設定すべきであるという主張を行う。まず、再帰動詞の考察を通じて、被動者項に使役主項と同一指示を与えることで使役主項の実現をブロックする操作として、再帰化 (reflexivization) を定式化する。そして、この操作を適用することで、ドイツ語の RA が使役構造からの派生形として分析されることを示す。また、ドイツ語の IA には、第3章でも言及した脱他動詞化 (detransitivization) の操作を適用するのが妥当であると主張する。この操作は、使役主項を語彙的に束縛することで、項構造への投射を妨げるものとして規定される。このような異なる語彙意味表示を想定することにより、第5章で扱っ

た RA と IA の間の意味的相違が生じる理由について、矛盾のない説明が可能であることを示す。また、ドイツ語の RA と IA に意味的に対応する日本語表現として、接尾辞-*ar* を伴う反使役動詞と、接尾辞-*e* を伴う反使役動詞を取り上げる。これらの動詞が *te-iru* 構文において示す有界性の解釈が、ドイツ語では現在完了形において同様に観察されることから、上記の語彙意味表示の想定が補強されることを指摘する。

最後に、第 7 章において、本論文の結論と今後の展望を述べる。先行研究では扱われていない新たな論点として、本論文では、ドイツ語の反使役動詞の形態的な相違が「対象物の本質的变化」という観点で意味的に動機づけられることと、ドイツ語の反使役動詞が日本語の反使役動詞と語彙的アスペクトの解釈に関して類似した振る舞いを見せることの 2 点を示している。系統の全く異なる言語間においても比類しうる動詞グループが確認されるという本論文の主張が正しいとすれば、反使役の範疇が個別言語ごとに大幅に異なるのではなく、ある程度普遍的な特徴を示す可能性があると考えられるだろう。結びとして、本論文で提案する再帰化分析の他言語への応用の問題と、反使役化以外の使役交替の実現パターンを解明する必要性、および、ドイツ語反使役動詞の意味的特性がテンス・アスペクトの体系と関連する可能性を将来的な課題として挙げる。